

1 単元名 それぞれの技でクルン！ピタッ！6組マット電車！ (器械運動・マット運動)

2 児童の変容

(1) 情意面 (形成的授業評価をもとにした授業評価から) 男子3名 女子1名 計4名



- ・「成果」は特に3時間目に数値が大きく向上した。児童全員が個に応じて設定した技を成功させることができたからである (津田沼の体育に示されている学年相応の技に挑戦することができた児童は2名)。単元内推移に着目すると、単元の「なか」の半ばにあたる部分で高い数値を記録している。個々の技能ポイントについて全員で話し合ったり、自分の技能の現状を確認したりしながら、明確な意図をもって課題解決学習に臨んだことが、児童一人一人の達成感につながったのだと考えられる。一方、単元の「なか」の後半に低い数値を記録している。ここでは、技能をさらに伸ばすために、同じ技に繰り返し挑戦する活動に取り組んだが、上達を実感できる声掛けや支援がもっと必要だった。
- ・「思考」においても単元前よりも数値が高くなった。特に高かったのは3, 4時間目である。この時間は、児童がそれぞれの目指す姿に近づくために技能ポイントや練習方法を考える時間だった。友達と課題を共有し、共に課題解決を目指したので、全員で試行錯誤しながら取り組んだ実感があつたのだろう。さらに、この時間の中で前転がりや跳び前転、倒立前転など、自分が取り組んでいる技を実際に成功させることができたため、数値が上昇したと考えられる。
- ・「関わり」においても単元前よりも数値が向上し、2時間目から全員が3 (満点) をつけている。上記のように、課題解決学習において、友達と関わり合いながら、共に試行錯誤しながら学習したことで、数値が高くなったと考えられる。また、児童同士の関わり合いが生まれる場を意図的に用意したことや、関わりを促す声掛けがあつたことなどが数値の上昇につながったと考えられる。さらに、場や教材の中に、それぞれの児童が好きな物やキャラクター、アニメの世界観などを盛り込むことによって、教材とも積極的に関わることができた。

(2) 技能面

	3年A児 (男子) 跳び前転			5年B児 (男子) ロンダート		
	できる	もう少し	できない	できる	もう少し	できない
単元前			○		○	
単元後	○			○		

	5年C児 (女子) 前転			6年D児 (男子) 跳び前転		
	できる	もう少し	できない	できる	もう少し	できない
単元前			○			○
単元後	○				○	

- ・単元前と比べて技能の向上が見て取れる。3年A児と6年D児は跳び前転に挑戦した。A児は前転の後に起き上がることができず、D児は前転をする際に背中を打ち付けてしまうという課題があつたが、練習の中で克服することができた。5年B児は倒立前転とロンダートに挑戦した。ロンダートは、空中で足がそろわず着地が乱れていたが、課題解決に向けて練習を繰り返す中で、より高い位置で足をそろえることができるようになった。5年C児は前転がりに挑戦した。単元の最初では頭をマットにつけることも怖がっていたが、スモールステップで練習を重ねるうちに恐怖心を乗り越えることができた。

(3) 思考面

3年A児(男子), 6年D児(男子) 挑戦する技 跳び前転

問 跳び前転ができるようになるための技能ポイントは何だと思いますか。(複数可)	
単元前	単元後
・しっかりと前転すること ・両手をつき, 勢いをつけてまわること	・勢いをつけること ・勢いをつけるために, 遠くに着手すること ・おへそを見てまわること ・頭の後ろ→首→背中の順番でまわること

- ・単元を終えて, 跳び前転に関する知識が定着したことがうかがえる。児童が技能ポイントを理解して, 課題を克服するためにどのようなことを意識して練習すればよいか考えることができた。前転の後に起き上がれないことと, 背中を打ち付けてしまうことの原因が勢いの弱さにあると気付くことができた。

5年B児(男子) 挑戦する技 ロンダート

問 ロンダートができるようになるための技能ポイントは何だと思いますか。(複数可)	
単元前	単元後
記述なし	・空中で足をそろえること ・より高い位置でそろえようとかっこいい ・足をそろえるために, 上履きを履いて音を鳴らす練習方法がよい

- ・技能が高く, 比較的早い段階で技を成功させることができたB児は, より雄大にするにはどうしたらよいかを考えることができた。技能ポイントに加えて, どのような練習方法が適しているかを考えることもできた。

5年C児(女子) 挑戦する技 前転

問 跳び前転ができるようになるための技能ポイントは何だと思いますか。(複数可)	
単元前	単元後
・手をしっかりとついて, 勢いよく回ること ・つむじではなく, 首の後ろをマットについて回ること	・頭の後ろ→首→背中の順番でまわること ・恐怖心に打ち勝つこと。そのために, 傾斜をつけた場で練習すること。

- ・マット運動に対する苦手意識が強かったC児は, 恐怖心に打ち勝つためにどうしたらよいか考え, 傾斜のある場で転がる練習をするという方法を思い付くことができた。

3 成果と課題

特別支援教育のめざす姿
1 教師の支援を受けながら一人で運動できる児童
2 自分で考えたり, 気付いたりしたことを仲間や教師に伝えることができる児童

【成果】

- ・自身の課題を知り, それを解決するための練習方法を考えるために, 一人一人の評価板を作成し, できていることとできていないことを示したのは有効だった。連続図を用いて視覚化したことも, 児童にとってより分かりやすく技能ポイントを確認する上で有効だった。
- ・ICT 機器を活用し, 良い例と悪い例を比べたことで, 児童自身が技能ポイントに気付くことができた。マット運動が得意な児童を良い例として取り上げたことは, 本人にとって活躍の場となり, 意欲向上にもつながった。
- ・マット運動に苦手意識がある児童に対し, スモールステップで技に取り組ませたことは, 意欲向上につながった。また, 児童の好きなアニメの世界観やキャラクターなどを用いた教材を作ったり, 活動中に児童の好きな音楽を流したりしたことは, 活動に対する意欲を高めたとともに, 児童同士が前向きに関わり合うとする姿勢に繋がった。

【課題】

- ・複式学級であるため技能差が大きく, 各々に困り感も異なる児童と一緒に学ぶ良さを生かし, 技の系統性をより意識して, スモールステップで教えていく必要がある。
- ・安全の確保に不安が残った。自分のペースで学習する児童に対して, 安全を確実に守らせるための手立てが必要である。